

会議名	アグリビジネス創出フェア2007
開催日時	平成19年11月27日(木)10:00～28日(金)17:00
開催場所	東京国際フォーラム 展示ホール(東京都千代田区丸の内3-5-1)
主催者	農林水産省
参加人数(概数)	約9,400名(主催者発表)
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>農林水産・食品産業分野の研究成果の実用化・産業化は農林水産省の重要な課題であり、これまで所管の独立行政法人をはじめとした関係研究機関の技術シーズを基にして、産学官連携による実用化・産業化のための研究を推進してきた。これを一層推進するため多数の研究機関と民間企業が一同に会し、情報交換や交流を行う機会を設ける手法が有効と考えられている。この出会いを目的として開催されたフェアに出席して収集した畜産に直接、間接的に関連する情報を報告する。</p> <p>技術展示ブースへの出展は、民間企業79社、大学関係機関39、公的・その他後援団体など28、マッチング支援エリアに17社・団体の合計163であった。2日間に会場内で併催のイベントとして、基調講演3、特別講演3、シンポジウム2、セミナー1の他、ブース展示企業・団体等の中から20分間のプレゼンテーション(過去における農水省研究資金助成プロジェクトによる成果などについて)が71課題が紹介された。</p> <p>11月27日:  <b>基調講演</b>「21世紀はアグリビジネスの時代」 小泉 武夫(東京農大)      全国の実践・成功事例を紹介しながら、グローバルな視点も加え、アグリビジネスの現状、展開方策、発想法、今後の展望などについての示唆に富む講演であった。アグリビジネスには独創、受皿、理論武装が重要。</p> <p><b>特別講演</b>「食品安全におけるリスクコミュニケーション」 野村 一正(食安委員会委員)      食品安全委員会の実績と今後の展望について、今後は上意下達ではダメで、行政、事業者、消費者間のコミュニケーションが行われ、単なる情報公開ではなく、相互に納得できる合意が形成されなければならない。</p> <p><b>特別講演</b>「機能性食品開発の活性化のために」 田中 隆治(サントリー技術監事)      長年にわたる機能性食品の商品開発経験からの提言。国内に限っても健康食品の市場は年間3兆円、トクホ(特定保健用食品)で1兆円と予測され、世界市場としては、医薬品開発の轍を踏まなければさらに大きなものになる。開発に当っては機能性食品素材の商品化に向けた制度化、臨床医と研究者の連携と相互理解が不可欠で、現在は有利な素材資源の開発、商品化の機会を逃しているのではないかと。先端バイオ技術を利用し、食の素材の機能を明らかにすると同時に商品開発の体制、組織、機構が大切で、そのような組織が形成されて機能しつつある事例について紹介された。</p> <p><b>セミナー</b>「農林水産省行政情報セミナー」      1)「公的機関の研究成果を活用した新食品・新素材の事業化支援施策について」宮本亮(生産局生産技術課):新需要創造対策事業として、平成19年度に実施した事業について紹介されたが、畜産に直接関連するものは少ないようだ。      2)「プロジェクト研究の推進について」引地 和明(技会事務局研究開発課):平成20年度事業として要求中の課題が紹介され、施行には公募方式が一段と強化され、家畜伝染病や粗飼料多給飼養など畜産関連のものも含まれているようである。      3)「競争的研究資金を活用した産官学連携の推進について」川本 憲一(技会事務局産学官連携研究推進室):平成20年度も公募方式で続けられる予定であるが、制度の一部見直しも行われる模様である。</p> <p><b>ステージプレゼンテーション</b>      A-1「アグリ市場向けの光応用技術」(松下電工):発光ダイオード(LED)を中心とした光応用の植物育成4事業の紹介。花が中心で、畜産分野では害虫防除器具の利用が考えられる。</p>

A-6「世界で初めて安定化させた次亜塩素酸の農業分野での利用」(環境農業資材協議会):安定化次亜塩素酸水の生成装置による人畜無害の環境機能水(CFW)とのことであるが、土壌消毒用で、畜産関連への用途は示されなかった。

A-11「新しい竹の加工法(特許取得)による竹の新用途と可能性、健康食品、飼料化、肥料化に成功」(丸大鉄工):“竹資源を活用した飼料調整技術”というふれ込みであるが、畜草研の研究成果は乳酸菌添加による発酵飼料の採食性向上までで、“竹の新用途としての飼料化に成功”は誤解を招く誇大表現。

B-9「家畜を活用した幹細胞研究 サル ES 細胞のヒツジ胎子内分化誘導とウシ乳腺幹細胞の分離・培養」(宇都宮大):家畜を利用したES細胞研究の最前線として、これまでの研究成果が紹介された。

#### 技術展示エリアにおける展示

A - 20「学・産との共同研究による製品を多数展示」(藤原製作所):最近発表された農研機構との共同開発による“フィードサンプラー”が展示された。梱包されたサイレージやTMRからの成分の化学分析資料採取用で、これによるサンプリング公定法としての基準化が必要であるが、用途は粗飼料の一部に限られるものであり“フィードサンプラー”は誇大表示。

B - 6「食品廃棄物の再生利用に関する事業提案“オカラ”から広がるINAXの循環・再生利用システム」(INAX):気流乾燥機による資源環境ビジネスモデルを提案。

A-16「チキン由来の抗酸化ジペプチド精製技術の紹介とその応用」(東海物産):畜産技術協会出資会社ジャニフ・テックの成果を含む“廃鶏屠体からの抗酸化ジペプチドの抽出・精製技術とその活用法の開発”などによる抗酸化ドリンク「アンカーFA」の提案。

E - 15「エミューを使用した加工食品(化粧石鹸、ナチュラル・オイル、どら焼き)」(株)東京農大バイオインダストリー)学生が主体となって網走に設立した資本金 1 円会社。エミューを現在 250 羽飼養。

E - 18「強稈性水稻長稈新品種の紹介ほか」(東京農工大):飼料・エネルギー自給率向上に貢献する「リーフスター」の紹介。

B - 16「産官学連携によるフードサイエンス・センターの活動」(新潟大):“美味しさのみをターゲットとした食肉の開発”ほかを紹介。

E - 30「生命環境科学系の技術シーズ 5 件の出展」(大阪府立大学):この中で“牛の繁殖効率向上のためのプロゲステロン留置製剤を併用する定時人工授精法”を紹介。

F - 1「新品種、最新技術を利用した食品の展示・試食と農業を支える最新の栽培技術・機械の展示」(農研機構):環境に配慮した畜産技術、家畜を衛る技術、新たな乳製品(チーズ飲料)など多彩な展示。

F - 2「ゲノム情報を基盤とした遺伝子の単離・機能解明と遺伝子組換え・DNAマーカー育種」(農業生物資源研):ブタのゲノム研究成果も含む。

F - 3「農業環境における安心・安全のための技術、微生物・植物機能の利用技術」(農環研):温室効果ガス3成分同時測定装置などを展示。

F - 4「研究紹介」(国際農林水産業研究センター):JIRCAS研究プロジェクト“東南アジアバイオマス資源の利活用技術開発”の成果紹介。

F - 8「畜産の発展と豊かな食生活に貢献します」(家畜改良セ):事業内容の紹介。

F - 13「地域結集型研究開発プログラム;環境に調和した地域産業創出プロジェクトの紹介」(群馬県産業支援機構):自然環境と調和した新しい畜産の創出を目指した畜産環境関連研究の取り組み状況と研究内容の紹介。

F - 17「有明海における環境調和型ノリ養殖体系の確立とゼロエミッション型ノリ産業の創出」(佐賀県地域産業シエンセンター):有明海再生のための研究のほか“鶏の免疫増強及び機能性鶏卵生産のための高機能性飼料の開発”も実施している。

H-13「民間企業が参画した様々な共同研究の促進で産官学の連携を図る、STAFFの活動」(農林水産業先端技術産業振興センター):政府の競争的資金を受けて実施している支援機関としての活動内容や成果の概要についての紹介、研究所の実績紹介。

11月28日:(報告者は出席しなかったが、次のようなプログラムが行われた。)

基調講演「ひっ迫する世界の食糧需給と日本の課題」柴田 明夫(丸紅経済研)

平成 19 年度若手農林水産研究者表彰(畜産分野では該当者なし)。及び受賞講演(平成 17、18 年度を含むポスター発表)

	<p>特別セミナー「中国におけるアグリビジネスの最新動向とチャンス」張 輝(技経創研)</p> <p>シンポジウム「地域におけるバイオマスの総合的利活用と地域活性化への挑戦燃料への挑戦」</p> <p>特別講演「アグリベンチャーの経営戦略」佐藤 光康(野村 R・A)</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>・特別講演「食品安全におけるリスクコミュニケーション」から、今後の畜産物の安全性に関連する研究開発課題は、その課題成果の出口として消費者を明確に意識した課題設定が益々重要なものとなる。</p> <p>・特別講演「機能性食品開発の活性化のために」から、食品成分の機能性については未知、未解明のものが多い世界であることに注目すべきである。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<p>・展示B - 18「トクホ、機能性食品と臨床試験ご紹介」(大阪市立大学医学部医薬品・食品効能評価センター):この受託・共同研究事業は出るべくして出てきた感じ。ほかの地域においても大学病院・研究者・生産者によるコラボレーションのモデルとなり得る。</p>
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<p>今回のフェアは農林水産・食品分野の技術開発研究資金一元化の流れを際立たせようとしたものとも感じさせられた。畜産技術協会が行う技術開発支援事業は、極力この流れとの重複を避けた別の流れとしなければならぬだろう。</p>
5. 会議の所感	<p>・前回まで共催者として名前を連ねていた団体等は後援に廻って農水省が主催者として単独で前面に出ており、状況の変化を感じさせられた。</p>
報告者	針生 程吉